Ｎｏ．９【２０１２年６月１日配信】

菅江真澄と青森（担当：村上）

こんにちは。私は、歴史普及活動による人材育成事業で採用され、4 月から市史編さん室で臨時職員をしている、村上亜弥と申します。編さん室での業務のほか、時には外に飛び出して、青森の歴史に関する知識を深めているところです。今回は外部研修ということで、県立郷土館で毎週土曜日に行われている「土曜セミナー」に参加してきましたので、その報告をします。

菅江真澄の解説板(善知鳥神社)

5 月 26 日の土曜セミナーは「菅江真澄（すがえますみ）『外浜奇勝（そとがはまきしょう）』を読む」というテーマで行われました。4 月 13 日のメールマガジンでもお知らせしましたが、今年 3 月、青森県立郷土館に『外浜奇勝』の直筆本が寄贈されました。菅江真澄は江戸時代後期の紀行家で、北海道、東北などを巡ってたくさんの記録を残しています。『外浜奇勝』は寛政 8 年（1796）と寛政 10 年（1798）に津軽の各地を歩いて書かれたものです。

今日は 6 月 1 日ですが、偶然にも『外浜奇勝』の始まりは 6 月 1 日で、次のように書かれています。

「六月一日　昨夜からこの弘前にきて、知人の中井某の家に泊まっている。朝早く、今日が氷室のためしといって、雪のような氷餅に、岩木山から取ってきたまことの氷もそえて、「めしあがれ」と出された。」

旧暦 6 月 1 日には「氷の朔日（ついたち）」と呼ばれる、氷や固い氷餅を食べて「歯固め」をする（＝長寿を祝う）風習があったそうです。岩木山の氷を食べるというのが弘前ならではですね。セミナーでは岩木山の氷を保存するという風習が戦前まで続いていたと聞き、たいへん驚きました。

菅江真澄句碑(善知鳥神社)

真澄の記録は文字によって記録されることの少ない庶民の生活を知ることが出来る貴重な史料です。真澄の日記を読み、当時の人々の生活を想像しながらその足跡をたどってみてはいかがでしょうか。

『新青森市史』通史編第 2 巻近世（672～691 ページ）では青森市域における真澄の旅の記録を紹介しております。当時名所となっていた三内の桜をはじめとするスケッチも掲載されておりますので、楽しみながらお読みいただけると思います。また、青森県に関する記述を手軽に読めるものとしては、東洋文庫の『菅江真澄遊覧記 3』もあります。

さて、先日私が参加した「土曜セミナー」ですが、興味のある回のみの参加も可能ですので、ぜひ気軽に郷土館へ足を運んでみてください。